

『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。(マタイによる福音書 20 章 4 節)

今日は妬みに関する物語が二つ読まれました。一つは旧約聖書のヨナ書です。ヨナは神さまの命令に背き、ニネベの人たちに「悔い改めよ」と言うことを拒否していました。しかし神さまからは逃れることができず、結局ニネベの人に「神さまの怒り」を伝えることになります。ヨナがニネベの人に語りたくなかった理由は、二つあります。一つはニネベの人たちが、とんでもなく悪かったということです。そしてもう一つは、ニネベの人たちが異邦人、つまりユダヤ人以外の人であり、神さまから見放されていると思われていたということです。

ヨナが神さまの命令を受けたにも関わらずニネベの人たちに悔い改めを迫らなかったのは、面倒くさかったからとか、気が乗らなかったからとか、そういう理由ではありません。彼には許せなかったのです。神さまがニネベの人を赦すのが。ある意味ヨナは、預言者としてとてもまじめだったのでしょう。絵本などでは神さまから追いかけて魚に飲み込まれてしまう、ちょっとコミカルなところが強調されますが、彼は預言者として、自分にも他人にも厳しく接していたのです。だから日頃から罪を重ねるニネベの人たちを、彼は苦々しく思っていたに違いありません。しかも彼らは異邦人です。神さまから悔い改めのチャンスが与えられるなんて、ダメだと思ったのです。そのまま滅びてしまふべきだと思ったのです。

これが嫉妬、妬みなのです。自分はこれだけやっているのに、

ずっと真面目にやって来たのに。聖書に出てくるファリサイ派や律法学者という人たちは、いつもそう考えていました。罪人、徴税人、娼婦、異邦人。神さまに背き、自分勝手に生きてきた人たちなど、神さまの恵みを受けるのにふさわしくないのだ。それが彼らの考え方だったのです。

イエス様はそんな彼らの「妬み」に気づき、今日の福音書の中でこのようなたとえを話されました。「天の国は次のようにたとえられる」、そうスタートしたたとえは、ぶどう園で働く労働者の話です。あるぶどう園の主人が、収穫のためでしょう、労働者を探しに夜明けに広場に出かけました。そこには多くの労働者が集まっていたからです。特にぶどうの収穫の時期には、猫の手も借りたいと思っているに違いない。そこで彼らは広場に集まって、自分が呼ばれるのを待っていたのです。

ぶどう園の主人は何人かの労働者を呼び集め、1 日 1 デナリオンの約束を交わしました。1 デナリオンとは、当時の労働者の一般的な 1 日の賃金です。ですからこの約束は、きわめて常識的なもの。労働者にとっても、何の不満もなかったことでしょう。

ここまでは、日常的にみられる出来事でした。しかしぶどう園の主人は、続いて 9 時ごろにも広場に行きます。そして何もしないで広場に立っている人を招き、ぶどう園に連れていくのです。まだ労働者が足りないと思ったのでしょうか。でもその後も、ぶどう園の主人は広場に行き続けます。夜明け前と 9 時に広場に行った主人は、12 時頃に、3 時ごろに、そしてなんとまもなく夕方になる 5 時ごろにも広場に行き、「あなたたちもぶどう園に行きなさい」と声を掛けたというのです。なぜぶどう園の主人は、こんなにも労働者を雇ったのでしょうか。ぶどう園が広くて、手が足りなくて困ってしまったからでしょうか。ただこのぶど

う園ですが、夜間照明がついているはずもなく、日が暮れば作業はおしまいです。夜明け前から働いている人はそれこそ 10 時間以上働いていましたが、5 時からの人の労働はよくて 1 時間でしょう。

ただここで少し、3 時や 5 時まで広場にいた人たちのことを考えてみたいと思います。日雇い労働者にとって、その日仕事につけるかどうかはすなわち、今日一日生きていけるかどうかに直結していることです。家族がいる人もいたでしょう。昨日も、一昨日も、仕事にありつけずにぐったりしている人もいたでしょう。今日こそはという思いで、夜明け前から広場に行っていたと思います。もしかしたら空腹のために、広場まで歩くのさえ困難な人もいたかもしれません。夜明けが近づくと、ぶどう園から次々と「うちのぶどう園で働かないか」との誘いがやってきます。

しかしすぐに呼ばれるのは、若く、体が大きく、力が強そうな人たち。自分たちはなかなか呼ばれません。9 時になり、またぶどう園の主人がやってきますが、連れていかれるのは元気そうな人たち。誰も自分には声を掛けてくれません。そうこうしているうちに、夕方が近づいてきます。もう今日働くのは難しいだろうなという、あきらめの思いも出てくることでしょう。家にいる家族の姿がちらついたかもしれません。

でもそこに、声がするのです。「なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか」、何もしていないわけではない。自分と呼んでくれる人がいないんだ。その思いで彼は、「だれも雇ってくれないのです」と言います。すると驚く言葉が返ってきました。

「あなたたちもぶどう園に行きなさい」。時間も遅いし、十分に働くことなどできない。心も体も疲れ果てている中で、でもきっと、彼は一生懸命働いたことでしょう。そして得た報酬は、みんな

と同じ 1 デナリオンだったのです。

これが天の国だと、イエス様は語りました。わたしはこれまで 40 人以上の方々の洗礼に携わってきましたが、いわゆる幼児洗礼はそのうち 5 名です。ほとんどの方が今日のたとえでいくと、9 時だったり、正午だったり、3 時だったり、5 時だったり、ひょっとするともう日もとつくに暮れていたり、そういう中で神さまに呼ばれ導かれているのです。「何事にも時がある」という言葉がありますが、それぞれの人がそれぞれのタイミングでぶどう園に呼ばれている、ということなのです。

そして神さまは、すべての人に必要な恵みを与えたいと願っておられる。早くからいるからとか、途中で怠けることなくやっていたからとか、若くて体力があって人の三倍働いていたからとかどうでもいいのです。少しの時間しかいなくても、途中でどっかにいっちゃったとしても、ただそこにじっとしているだけでも、ぶどう園に来ただけでいい。あなたには十分な恵みをあげるから。それがたとえの中のぶどう園の主人の姿、そしてこれが天の国の神さまの姿だということなのです。

夜明け前から働いている人、自分も 5 時からの人と同じだけの 1 デナリオンしかもらえずに怒っていました。妬んでいました。その気持ち、よくわかります。現実社会でそんなことをする経営者がいたら、どうなるのでしょうか。

でもこれは、神さまの愛の中でのお話です。その恵みは、神さまがすべての人に与えたいと切望しているものです。「自分の方が多くもらえるはずなのに」、「あの人何にもやっていないのに」、そのような妬みの心は必要ありません。お互いに神さまからいただいた恵みを喜び合う、そのようなわたしたちでありたいと思います。